

あなたは私の青春そのもの

中島一郎 — マーケティングマネージャー

『ルージュの伝言』 松任谷由実／角川書店／1983年



日本の歌姫、松任谷由実が母校に来てコンサートを行ったのは、私が高校3年生の頃だった。

それはちょうど、「時のないホテル」を発表した頃だっただろうと思う。その作品が描きだして見せた恋愛の風景は、男子校に通っていた自分には、経験したことのない大人っぽい艶のある恋のお話だった。

なにしろ男子校に通う高校生が恋愛のいろはを知っているわけもなく、女の子とは喫茶店で珈琲を飲んだりするのがやっとの時代だった。それでも本人は付き合っているのだと思っていた。恋愛という言葉にリアリティはなく、およそ彩りのないものだったわけである。

彼女が本書「ルージュの伝言」の中で、自分の作品について語っている言葉がある。

ラブソング書いていても、ラブソングを書いているとは思ってないの。ラブソングという設定をかりて、もっと他の風景とかをいいたいの。日の光や、水の影や。

ユーミンの曲の中で、私たちは、いくつかの恋愛の情景を見ることになる。瞬間の輝きみたいなことだと本書には書かれている。ラブソングではあるのだが、心情が言葉で説明されているのではなく、絵画のようにその瞬間が切り取られている。

この絵画のように瞬間を切り取る手法は、彼女が美大で絵画を学んでいたという経験に基づくものだろう。本書でも、芸大をめざして受験勉強をしていた頃の気持ちや、家庭教師の先生との思い出が語られている。その後、音楽という別の道に進むことになるが、彼女のベースを形作っているのは、この青春期の経験なのだろう。

ユーミンのコンサートに一緒に行った女の子とは、帰り道で、どの曲が一番好きかとか、たわいもない話をした。当時の淡い気持ちは、曲の中に描かれているような大人っぽい展開をみせることもなく、静かに終わりを告げた。

私の心のギャラリーにある

あなたの描いた風景は

悲しいほどお天気

「悲しいほどお天気」という作品は彼女が絵の学校に通っていた頃の思い出話だという。

宝石のような言葉の数々、恋愛そのものというより、自分がそのとき、確かにそこにいたという実感、その空気や風を、詩とメロディという形式がしっかり残してくれている。本書は、作品の後ろにいるちょっと空想癖がつよい女の子の素顔を伝えてくれている。恋をしたいと思っている高校生に、ユーミンの世界をもっと知ってもらいたい。